# ９［小説］『金閣寺』

［１］　父の死によって、①私の本当の少年時代は終るが、自分の少年時代に、まるきり人間的関心ともいうべきものの、欠けていたことに私はくのである。そしてこの愕きは、父の死を自分が少しも悲しんでいないのを知るに及んで、愕きとも名付けようのない、或る無力な②感懐になった。

［２］　けつけたとき、父はすでに棺の中に横たわっていた。というのは、内浦まで徒歩で行って、そこから船を頼んで、浦づたいにへかえるには、丸一日かかったからである。季節は入り前の、照りつける暑い毎日である。私が対面すると、は荒涼たるの焼場に運ばれて、海のほとりで焼かれることになっていた。

［３］　田舎の寺の住職の死というものは、異様なものである。適切すぎて、異様なのである。彼はいわば、その地方の精神的中心でもあり、の人たちのそれぞれの生涯の後見人でもあり、彼等の死後を委託される者でもあった。その彼が寺で死んだ。それはまるで、職務をあまりにも忠実にやってのけたという感銘を与え、死に方を教えてっていた者が、自ら実演してみせてあやまって死んだような、一種の過失とった感を与える。

［４］　実際父の柩は、用意万端整えられていたものの中にはめ込まれたような、所を得すぎた感じで置かれていた。母やや檀家の人々はその前で泣いていた。雛僧のたどたどしいａ読経も、半ば、柩の中の父の指示に頼っているという風なのである。

［５］　父の顔は初夏の花々に埋もれていた。花々はまだ気味のわるいほど、なまなましく生きていた。③花々は井戸の底をのぞき込んでいるようだった。なぜなら、死人の顔は生きている顔の持っていた存在の表面から無限にし、われわれに向けられていたののようなものだけを残して、二度と引き上げられないほど奥のほうへ落っこちていたのだから。物質というものが、いかにわれわれから遠くに存在し、その存在の仕方が、いかにわれわれから手の届かないものであるかということを、死顔ほどｂ如実に語ってくれるものはなかった。精神が、死によってこうして物質にｃ変貌することで、はじめて私はそういう局面に触れ得たのだが、今、私にはｄジョジョに、五月の花々とか、太陽とか、机とか、校舎とか、鉛筆とか、……そういう物質が何故あれほど私によそよそしく、私から遠い距離に在ったか、その理由がみ込めて来るような気がした。

［６］　さて、母やたちは、私と父との最後の対面をっていた。しかしこの言葉が暗示している生ける者の世界の類推を、私のｅ頑なな心は受けつけなかった。④対面などではなく、私はただ父の死顔を見ていた。

［７］　はただ見られている。私はただ見ている。見るということ、ふだん何の意識もなしにしているとおり、⑤見るということが、こんなに生ける者の権利の証明でもあり、残酷さの表示でもありうるとは、私にとって鮮やかな体験だった。大声で歌いもせず、叫びながら駈けまわりもしない少年は、こんな風にして、自分の生を確かめてみることを学んだ。

●語注

檀家＝その寺に属し、布施をして寺の財政を助ける家。

雛僧＝おさない僧。小僧。

■覚えておきたい語句

□８後見人……………人の後ろ盾となって世話をする人。

□９やってのける……やりとげる。

□11所を得る…………その人にふさわしい地位や仕事につく。

□16陥没………………落ち込んで、へこんだ状態になること。

□18如実………………事実のままであること。

【読みのセオリー】

★比喩の効果

　比喩という修辞法は、文学作品において多用されている。

　比喩には①直喩（明喩）②隠喩（暗喩）③擬人法（）④擬態語・擬声語（声喩）⑤がある。

　分類は重要ではないが、どれにしても、それぞれの箇所でどのような効果を意図した表現なのか（何を強調しているのか）考えてみることが重要である。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①とあるが、どのような経験をしたのか。本文中から一五字以上二〇字以内で抜き出せ。（6点）

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問２　傍線部②「感懐」とほとんど同じ意味の言葉を、次から選べ。（4点）

ア　感動　　イ　所感　　ウ　感激　　エ　雑感　　オ　感傷

〔　　　〕

問３　第3段落は、前後の段落と表現上異なる点がある。それを一五字以内で指摘せよ。（8点）

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部③について

⑴「井戸の底」とは何をたとえているのか。同じ段落内から三字で抜き出せ。【読みのセオリー】

⑵このような表現をすることで、どのようなことを強調しているか。簡潔に説明せよ。（6点＋8点）

⑴［　　　］⑵［　　　　　　　　　　］

問５　傍線部④とあるが、私がそうしていたのはなぜか。最も適当なものを次から選べ。（6点）

ア　父の死を、人間的関心のない自分はまったく悲しんでいなかったから。

イ　父の死が突然で、心の準備ができていなかったから。

ウ　人前では自分の本心を表すことができなかったから。

エ　死んだ父はすでに単なる物質としか感じられなかったから。

オ　父の死が用意万端整えられたものであることに反感を感じていたから。

　　〔　　　〕

問６　傍線部⑤「見るということが、こんなに生ける者の権利の証明」であるのはどうしてか。（見る）（物質）（死人）という言葉を用いて、四〇字以内で説明せよ。（12点）

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

【解答】

漢字　ａどきょう　ｂにょじつ　ｃへんぼう　ｄ徐々　ｅかたく

問１　自分の生を確かめてみることを学んだ（17字）

問２　イ

問３　父の呼称が彼となっている点（13字）

問４　⑴＝父の顔　⑵＝生と死の隔たりの大きさ

問５　エ

問６　見るという主体的行為は、物質となってしまった死人にはできないことであるから。（38字）

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の対義語をそれぞれ答えよ。

68需要　⇔　69［　　　　］

70刹那　⇔　71［　　　　］

72本音　⇔　73［　　　　］

74革新　⇔　75［　　　　］

76精神　⇔　77［　　　　］

78模倣　⇔　79［　　　　］

80安堵　⇔　81［　　　　］

82弛緩　⇔　83［　　　　］

84人為　⇔　85［　　　　］

86希薄　⇔　87［　　　　］

【解答】

69供給　71永劫　73建前（立前）　75保守　77肉体　79創造　81危惧　83緊張　85自然　87濃厚

〔場面解説〕

　この小説は、貧しい寺に育った「私」（溝口）が金閣に火を放つまでを描いた作品である。幼少期から私に金閣の美しさを語り続けてきた父は、結核を患っていた。そしてある日、大量の喀血をして死んだという知らせが届く。中学生だった私が、通学のために預けられていた叔父の所から田舎の寺に急いで帰った場面。

〈作者＆出典〉三島由紀夫（みしま・ゆきお）一九二五（大正14）年東京四谷生まれ。本名、。学習院中等科在学中から小説を書き、戦後川端康成の推薦で『』『岬にての物語』などを発表。代表作『仮面の告白』『』『』『』など。一九六八年〈の会〉を結成し、自衛隊体験入隊などを繰り返し、一九七〇年同会の学生と東京市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部に乗り込み、自衛隊の決起を促したが果たせず、割腹自殺した。海外でも多くの国で訳され、その独特の官能的三島美学は高い評価を得ている。本文は、『金閣寺』（新潮文庫、二〇〇三年）より。